山口芸術短期大学研究紀要　第50巻,127から134(2018)

紙芝居に対する保育士の学びの実態と課題

－ 紙芝居研修会の分析に基づいて －

浅　井　拓久也　　森　下　嘉　昭

１．研究目的と背景

本研究では、紙芝居に対する保育士の学びについて実態と課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、紙芝居研修会の分析を通じて、保育士が紙芝居について学んできたことや研修会で学んだことを明らかにする。紙芝居に対する保育士の学びの内実がわかることで、保育における紙芝居のあり方や今後の展望について示唆を得ることができる。

保育で用いられる児童文化財には、絵本、紙芝居、童謡、パネルシアターなど、伝統的に用いられてきたものから比較的新しいものまで多様にある。なかでも、絵本、紙芝居、ペープサート、パネルシアターは代表的な児童文化財といえる（谷田貝・廣澤2014、107-108）。これらが児童文化財の代表的な位置づけにあるのは、教育的な機能があるからである。古橋（2016､17-20）は､ことば･知識・人間を知る（知育）、人間の生き方を学ぶ（徳育）、美の意識を培う（美育）の３つの教育的な機能があり、これらが一体となって教育的な効果を生むことを指摘している。

こうした児童文化財のなかでも、保育の場で活用されがちなものとそうではないものがある。絵本、ペープサート、パネルシアターと比べると、紙芝居は保育のなかで活用されないことが多い。保育士を対象とした調査からも、紙芝居は絵本より活用されていないこと、紙芝居を学んだ記憶がない保育士や紙芝居の適切な演じ方を理解していない保育士が多いことが明らかとなっており、保育のなかで紙芝居が十分に活用されていないことが示されている（正司2015、正司・渡邉2017）。

こうした背景をふまえて、保育士が紙芝居を学ぶ機会として各地で紙芝居研修会が開催されてきた。子どもの頃や学生の頃に紙芝居を見る､作る､演じる経験をしていない、あるいは経験の少ない保育士は保育のなかで紙芝居を積極的に選択することは難しいであろう。また、紙芝居を知っていても、実際の演じ方を知らない保育士も紙芝居ではなく絵本を選択するであろう。保育士が子どもの遊びのなかで紙芝居を選択するためには、紙芝居研修会を通じて紙芝居について理論的、実践的に学ぶことが必要である。保育士の保育の幅が広がるということは子どもの遊びの充実につながることからも、紙芝居研修会の役割や意義は大きいと言えよう。

しかし、紙芝居に関する先行研究を概観すると、保育士を対象とした実証的な研究は必ずしも多くない。多くの先行研究は、歴史的な観点からその位置づけや教育的な意義の変遷を研究したものや（鬢櫛・種市2005、鬢櫛・種市2006、石山・佐々木2006、鬢櫛・野崎2009、佐々木2016）、紙芝居の実演方法など実践的なものであった（佐々木･野村･石山2005、柳田2016）。これらの研究は、紙芝居の教育的な意義や保育での位置づけを考えるうえで重要なものである。しかし、これらの研究は紙芝居の意義や位置づけ、あるべき実演の姿を明らかにしたものであり、いま実際の保育士が紙芝居に対してどのような理解や学びをしているかというものではなかった。紙芝居の意義や価値に関する議論は重要ではあるものの、紙芝居が子どもの遊びを充実させるものであるということをふまえると、実際の保育の場でそれを選択する保育士がいまどのような理解をしているのか、何を学び、学んでいないのかという実態をふまえた研究が必要となる。

そこで、保育における紙芝居の実態を把握する研究もなされてきた。このような研究は、学生を対象としたものと保育士を対象としたものの２つにわけられる。前者は保育者養成校の学生を対象とした紙芝居に関する質問紙による調査である（鬢櫛・野崎2010、鬢櫛・野崎2011、大元2013）。これらの研究は学生を対象とすることで、保育士になる前の段階でどのような意識をもっていたかを明らかにしている。一方、後者では保育士の年齢や経験年数別に、紙芝居の使用状況や演じるさいに注意していること（声の出し方や間の取り方

など）を質問紙調査し、単純集計した結果を提示する研究であった（鬘櫛・野崎2010、野崎他2012、正司2015）。こうした研究では、質問紙の回答が単純集計されているのみであり、統計学的な観点から分析されていないためその数字の妥当性に疑問が残る。先行研究では、新人保育士と保育所施設長の紙芝居に対する考えの差異について検定を実施した研究が１つあるにとどまってきた（正司・渡邉2017）。

そこで、本研究では、紙芝居に対する保育士の学びについて実態と課題を明らかにするために、紙芝居研修会の分析を通じて保育士が紙芝居について学んできたことや研修会で学んだことを明らかにする。とくに、研修会前後で保育士が紙芝居について何を学び、学んでいないかを明らかにすることで保育における紙芝居のあり方や今後の展望について示唆を得ることができると思われる。

紙芝居が子どもの遊びを充実するために必要なものであるということからすれば、紙芝居をあまり使っていない保育士や使い方がわからない保育士が、どう変化したかが重要である。すなわち、保育士を対象とした紙芝居研修会で何が学ばれ、学ばれていないのかに関する分析が必要となる。保育士が紙芝居の意義や実践方法を理解していない状態から理解し、活用したいという状態に変化することが、保育のなかで紙芝居が活用され、子どもの遊びが充実することにながっていくことから、研修会前後の分析が必要となるのである。

２．研究方法

（１）紙芝居研修会の概要

本研究で扱う紙芝居研修会は、講師や内容ともにほぼ同一で年数回開催されるものであり、参加者は保育士が中心である。保育における紙芝居の理論と実践の普及を目的として、大学教員や紙芝居実践家が共同開催している研修会である。研修会開催は大学のホームページなどを通じて広く告知され、参加するために特別な手続きは必要なく、保育士であれば経験年数や職位などに関わらず参加することが可能である。

紙芝居研修会の内容は毎回ほぼ同一である。紙芝居の特徴、作り方、演じ方の３つである。まず、紙芝居の特徴については、『おおきくおおきくおおきくなあれ』（まついのりこ）や『ごきげんのわるいコックさん』（まついのりこ）を用いて、紙芝居の形式や絵本との違い、舞台の必要性について講義される。具体的には、まず紙芝居の形式（物語完結型と観客参加型）について説明される。次に、紙芝居と絵本の似ているところ、違うところが説明される。どちらも絵と言葉で構成されているところは共通であるが、紙芝居には抜くという行為があること、舞台があることが絵本と異なることである。このとき、舞台の必要性、舞台の役割についても詳説される。

次に、紙芝居の作り方では、乳児対象の紙芝居を題材として受講者が実際に紙芝居を作るという内容である。子どもの目線と発達に即した留意点や、講師の一人が実際に制作した紙芝居を用いて制作のさいに気を付けるところや工夫したところの説明もされる。

最後に、紙芝居の演じ方では、『ひよこちゃん』（チュコフスキー）を題材に、声の出し方、紙芝居の抜き方、間の取り方、下読みのポイントなど演じるさいに必要な基本的な事項が講義される。

（２）本研究で用いる質問紙

本研究で分析に用いる質問紙は、先に説明した研修会のうち2016年12月、2017年10月に開催された研修会で配布し回収したものである。受講者は、保育士および保育補助者であった。各回の受講者は40名、75名であった。

研修会後、受講者に質問紙を配布し回答したうえで提出することとした。質問紙への回答は無記名とし、自由意思に基づいて回答すること、回答を拒むことができることなどを説明したうえで、回答への記入を行うようにした。

質問紙は即日回収した。回収数（率）は、それぞれ35枚（88%）、57枚（76%）であった。サンプル数がやや少ないことは留意すべきであるが、紙芝居を取り上げた研修会はあまり多くないため研修会での保育士の学びを調査するには限界がある。そのため、こうした留意点に配慮しながら分析を行うこととした。

（３）質問紙の内容

質問紙の内容は、２回の研修会とも同一であった。紙芝居に対する保育士の学びの変化を確認するために、紙芝居研修会の前後で質問紙調査を実施した。

質問紙の項目は３つからなる。まず、受講者の

基本的な属性を質問する「性別（男女)」、「年齢(10代から60代以上までの６件法)」、「保育士としての勤続年数(１年未満から30年以上の６件法)」、「現在の勤務形態（常勤保育士、非常勤保育士、常勤保育補助者、非常勤保育補助者、その他の５件法)」である。

次に、研修会前の質問紙では、「学生時代に紙芝居の演じ方およびその特性について学びましたか」、「社会人になってから紙芝居の演じ方およびその特性について学びましたか」、「現在の職場には紙芝居の舞台がありますか」、「これまでに紙芝居を演じたことがありますか」、「これまでに紙芝居を演じるときに舞台を使って演じたことがありますか」（先の質問にはいと回答した場合のみ）について「はい」か「いいえ」で回答するよう求めた。

最後に、研修会前後で、「紙芝居を用いた保育活動に興味がある」、「紙芝居を保護者参加の保育活動に使っていくことに関心がある」、「紙芝居をこれからの保育に役立てたい」、「紙芝居を毎月のお誕生会に役立てたい」、「子どもが言葉を獲得するために紙芝居は役立つ」、「子どもが言葉によって心を育むために紙芝居は役立つ」、「紙芝居の形式と特性について理解している」、「紙芝居と絵本の特性の違いについて理解している」、「紙芝居の基本的な演じ方について学んだ」、「紙芝居の講習会にもっと参加してみたい」、「さらに紙芝居の演じ方について個人的に学んでみたい」、「紙芝居は絵本よりも協同保育に向いている」について、「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の４件法で質問した。

なお、研修会後の質問紙にて、研修会受講の感想や研修会で使用した紙芝居について自由記述を求めた。

（４）倫理的配慮

受講者が質問紙に回答する前に、調査目的と内容、回答は学術研究の目的でのみ使用されること、自由意志および無記名によることなどを口頭で説明した。回答の提出をもって同意とした。

３．結果

まず、紙芝居を学んだこれまでの経験、実演した経験に関する集計結果を確認する（図１）。

図１から、多くの保育士が学生時代に紙芝居について基本的なことは学んでいることがわかる(67%)。しかし、社会人になってから（保育士として勤務するようになってから）は紙芝居について学ぶ機会がほとんどないこともわかる（72%)。

次に、紙芝居を実演した経験については、「こ

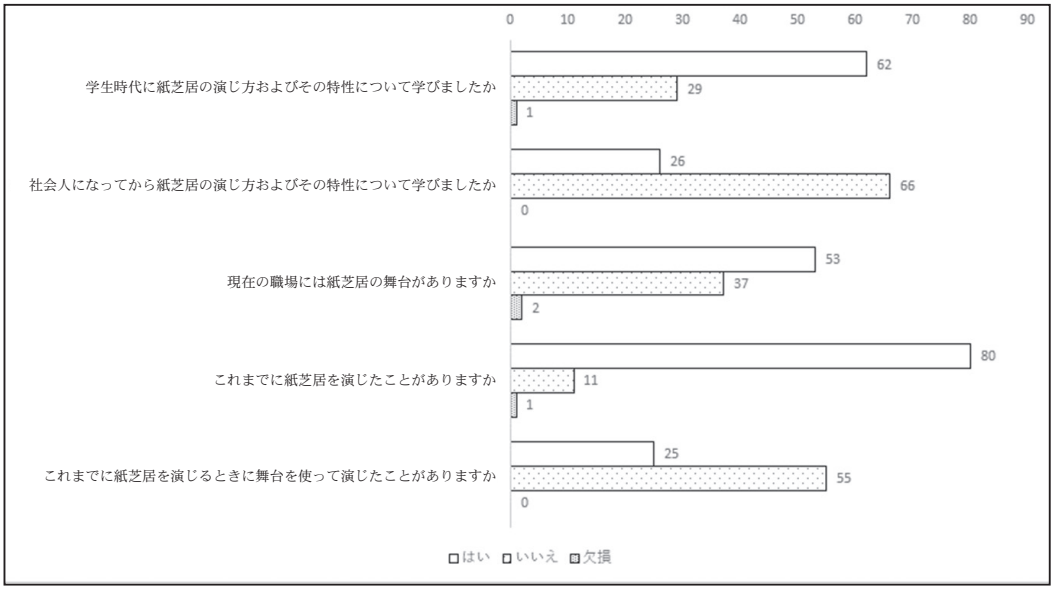

図１　紙芝居の学習・実演の経験

れまでに紙芝居を演じたことがありますか」に対して87%の保育士が保育のなかで紙芝居を使用した経験を有している。そもそも紙芝居研修会に参加するということは紙芝居に興味や関心があると推測されるためこの数字が保育士全体を代表するものではないことには留意すべきではあるが、保育の中で紙芝居が使用されていることがわかる。実演に関して、紙芝居には舞台が必要であることは多くの紙芝居実演者が指摘しているが、保育所に紙芝居の舞台が用意されているか否かについてはほぼ同じ割合であった（あり58%、なし40%）。また、「これまでに紙芝居を演じるときに舞台を使って演じたことがありますか」という舞台使用経験については、多くの保育士が使用していないと回答している（69%）。つまり、紙芝居を実演した経験はあるが、舞台は使用しないで行う保育士が多いということである。

なお、図１ではX^2二乗検定の結果、0.1%水準ですべて有意な結果であった。また、性別や勤務年数とのクロス表では有意差が見られなかった。

次に、紙芝居に対する学びの変化について研修会前後で比較する（図２）。

図２は、研修会前後の各質問項目の単純集計結果を表している。「そう思う」を研修会前後で比べてみると、すべての項目で研修会後が上回っていることがわかる。また、「そう思う群」（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）も、「そう思わない群（「あまりそう思わない」と「そう思わない」）の合計」を上回っている。

また、質問項目によって研修会前後の回答に大きな差があることがわかる。そこで、各項目別に研修会前後で「そう思う」の割合がどのように変化したかを確認していく（表１）。

表１から、特に変化が大きな項目は、「紙芝居の形式と特性について理解している」（５%から43%）、「紙芝居と絵本の特性の違いについて理解している」（５%から54%）、「紙芝居の基本的な演じ方について学んだ」（16%から82%）、「紙芝居は絵本よりも協同保育に向いている」（20%から61%）であることがわかる。

以上の結果を概観すると、研修会前後で紙芝居に対する意識が大きく変化（肯定的な回答への変化）したことが推察される。そこで、各質問項目に対してウィルコクソンの符号付き順位検定を行った。その結果を示したものが図３である。

表１　研修会前後の「そう思う」の割合

	研修会前	研修会後
紙芝居を用いた保育活動に興味がある	57	80
紙芝居を保護者参加の保育活動に使っていくことに関心がある	43	60
紙芝居をこれからの保育に役立てたい	77	90
紙芝居を毎月のお誕生会に役立てたい	26	28
子どもが言葉を獲得するために紙芝居は役立つ	53	71
子どもが言葉によって心を育むために紙芝居は役立つ	67	82
紙芝居の形式と特性について理解している	5	43
紙芝居と絵本の特性の違いについて理解している	5	54
紙芝居の基本的な演じ方について学んだ	16	82
紙芝居の講習会にもっと参加してみたい	38	63
さらに紙芝居の演じ方について個人的に学んでみたい	32	45
紙芝居は絵本よりも協同保育に向いている	20	61

単位：%

まず、「紙芝居を保護者参加の保育活動に使っていくことに関心がある」、「紙芝居を毎月のお誕生会に役立てたい」、「子どもが言葉によって心を育むために紙芝居は役立つ」は研修会前後で有意な差が確認できなかった。

次に、「紙芝居をこれからの保育に役立てたい」、「言葉を獲得するために紙芝居は役立つ」は５%水準で有意であり、「紙芝居を用いた保育活動に興味がある」、「紙芝居の形式と特性について理解している」、「紙芝居と絵本の特性の違いについて理解している」、「紙芝居の基本的な演じ方について学んだ」、「紙芝居の講習会にもっと参加してみたい」、「さらに紙芝居の演じ方について個人的に学んでみたい」、「紙芝居は絵本よりも協同保育に向いている」は0.1%水準で有意であった。

とくに、肯定的な回答への移動の割合が大きいものは、「紙芝居の形式と特性について理解している」（79%）、「紙芝居と絵本の特性の違いについて理解している」（77%）、「紙芝居の基本的な演じ方について学んだ」（77%）、「紙芝居は絵本よりも協同保育に向いている」（56%）であった。

以上の結果を整理すると、次のことが確認できた。まず、多くの保育士は紙芝居に関して学生の

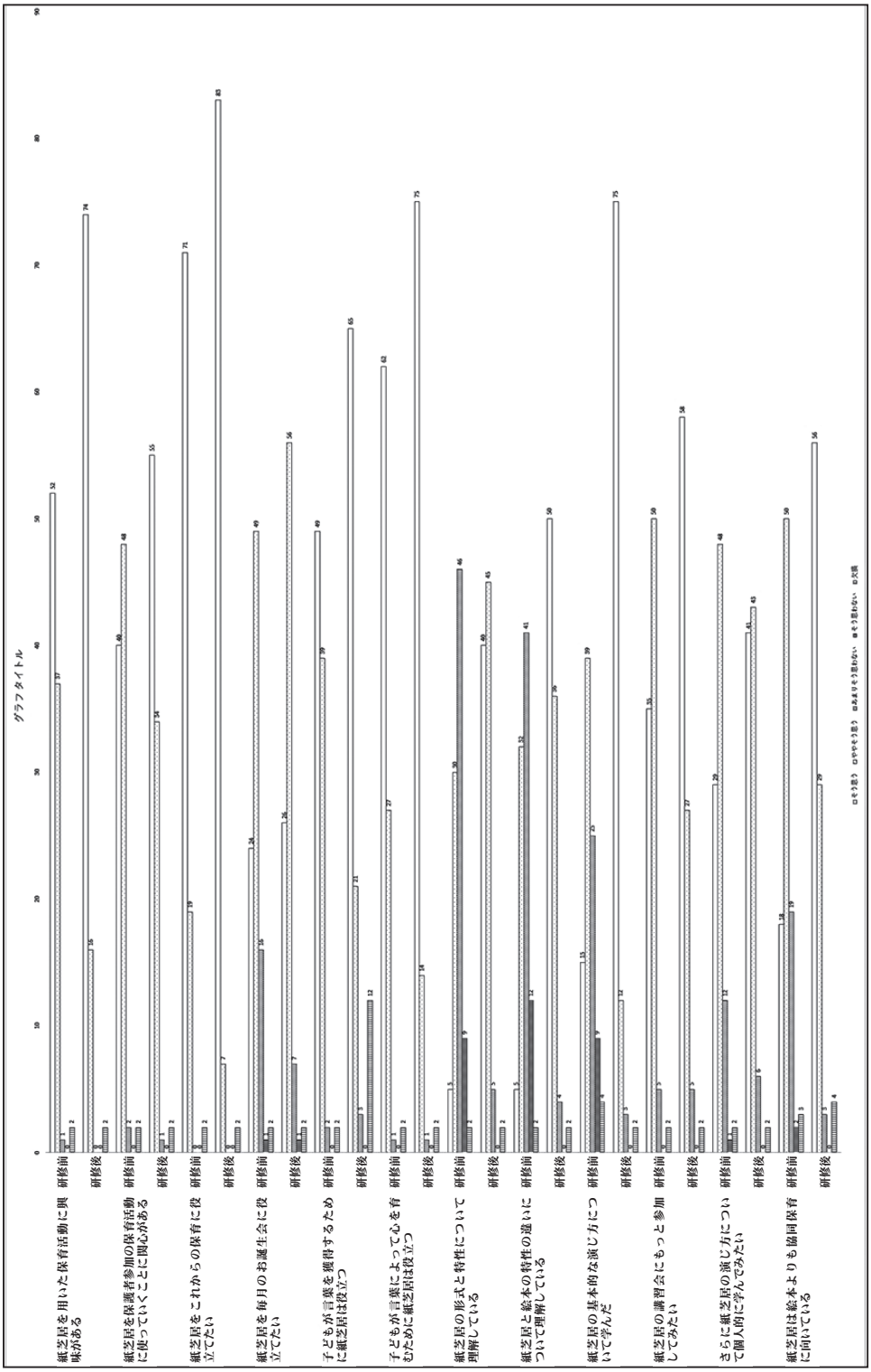

図２　紙芝居の理解に関する研修会前後比較

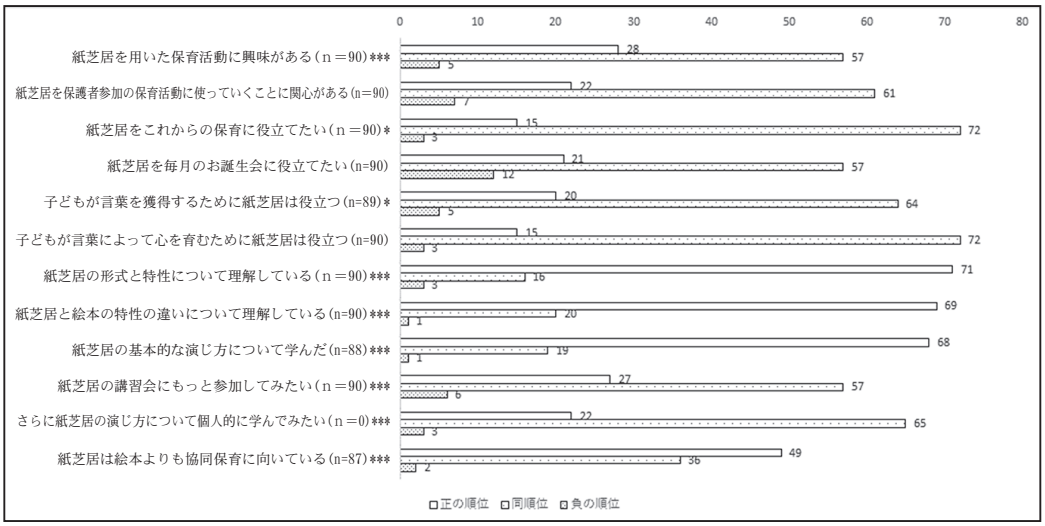

図３　ウィルコクソンの符号付き順位検定の結果

頃に学んだ経験があり、紙芝居を保育の中で活用していた。しかし、保育士として従事してから紙芝居に関して学ぶ機会はあまり多くないことがわかった。また、紙芝居を実演するさいは舞台を使用しないことが多かった。

次に、研修会前後で紙芝居に対して何を学んだかについて検討した。結果として、すべての項目で研修前より研修後のほうが学びを得たという回答であった。とくに、紙芝居の形式と特性、紙芝居と絵本の違い、紙芝居の基本的な演じ方、協同保育での活用について大きな学びを得ていたことがわかった。

４．まとめと今後の課題

本研究の目的は、紙芝居に対する保育士の学びについて実態と課題を明らかにするために、紙芝居研修会の分析を通じて保育士が紙芝居について学んできたことや研修会で学んだことを明らかにすることであった。とくに、研修会前後で保育士が紙芝居について何を学び、学んでいないかに着目してきた。

分析の結果、紙芝居に対する保育士の学びの実態と課題について２つのことが示唆される。まず、紙芝居研修会の必要性である。学生の頃に学んだ紙芝居に関する知識や技能の再確認、刷新をする学びの場が必要ということである。多くの保育士は学生の頃に紙芝居を学んでおり、保育のなかで活用していた。しかし、保育経験のない学生の頃に学んだだけでは保育のなかで紙芝居を適切に活用していくことは容易なことではないだろう。このような場合の多くは自己流のやり方となり、紙芝居の魅力や可能性を十分に引き出すことが難しくなる。だからこそ、保育士としての経験が積み重なっていくなかで紙芝居について学ぶことで、学びが深まるのである。その機会が研修会なのである。

分析結果から、紙芝居の形式や特性、紙芝居と絵本の相違、紙芝居の基本的な演じ方、協同保育での活用についての学びが最も大きかった。紙芝居の基本的な原理や原則は保育士が学生の頃に学んだものとは大きくは変わらない。実際、分析に用いた研修会のなかで説明されていた内容は、どの教科書にも記載されている基本的な事項ばかりであった。にもかかわらず、年齢や経験年数にかかわらずこうした項目に対する学びが大きかったのは、実際に保育の場面や子どもの姿や様子がイメージできるからこそ、より深く学ぶことができるからではないだろうか。

現在、紙芝居研修会は絵本の読み聞かせやペープサートなどの製作の研修会と比べると多くはない。紙芝居に特化した研修会となるとなおのことである。しかし、野崎他（2012、93）が「保育の中に紙芝居の特性を活かした使い方を浸透させたり、紙芝居をオリジナルな教具教材として、活用

できるように導いていくためには､保育養成校で､保育者になる前の学生に関心を持たせることは言うまでもないが、保育経験年数が16年以上のベテランの保育者の資質と力量を発揮してもらえるような援助が必要」と言うように、保育のなかで紙芝居の特性や魅力を最大限に発揮するためには、保育士対象の紙芝居研修会が必要となる。保育の経験を得てから学ぶことで紙芝居の知識や技能をより深く理解でき、ひいては保育士自身の保育の幅を広げることになるからである。

次に、保育における紙芝居の実証的な研究の必要性である。この点は紙芝居研究の今後の課題でもあるが、先に述べたように、紙芝居に関する研究は歴史的な観点からその意義や教育的な位置づけを分析した研究が多く、実際の保育における紙芝居に関する実証的な研究は少ない。その多くは、質問紙を用いてその結果を単純集計したにとどまっていた。紙芝居の教育的な効果について統計的に分析したような実証的な研究はほとんど見られなかった。

本研究では、保護者参加の保育や誕生会のような非日常的な保育のなかでの紙芝居の活用に関する学びには統計的な有意差が確認できなかった。多くの保育士は紙芝居の基本的な特性や実演方法に関する学びが大きかった。この結果をふまえれば、保育士対象の研修会で優先的に伝えることは紙芝居の基本的な特性や実演方法と言えよう。すなわち、実証的な研究をもとにして、保育士が紙芝居に関して学ぶことができるような環境を用意していくことが、保育のなかで紙芝居が有効に活用され、子どもの遊びが充実していくことになっていくということである。

あるいは、多くの紙芝居の実演家や研究者は舞台の意義を指摘している。もちろん、紙芝居の特性を考えると同意できるものであるが、一方で舞台がある場合とない場合では物語の伝わり方がどのように違うか、聞き手の理解にどのような差が生じるかという研究はない。保育所に舞台があっても多くの保育士が舞台を使用していないのは、舞台を用意するという行為が保育のなかでは心理的物理的な負担であることが推察される。この場合、紙芝居の特性から舞台の意義を一方的に説明しても実際の保育の場面で舞台を用いるということにはつながらないであろう。こうした場合、舞台の有無によって効果や理解が異なるということが明らかとなれば、舞台を用いる可能性も高くなるであろう。

また、紙芝居と絵本の違いという観点からは、『ひよこちゃん』のように同じ作品が絵本と紙芝居で発刊されていることもある。これまでの研究では、紙芝居と絵本の違いについて説明したり、保育士がその違いを認識しているかという調査にとどまっていた。紙芝居の実証的な研究という観点からすれば、形式の異なる同じ作品が聞き手にどのように理解されたのかを分析し明らかにすることが重要である。

鬘櫛･野崎（2010、71）は「絵本との比較では、概して紙芝居より絵本の方が活用頻度は高いことが明らかとなった。またそのことが両者の保育数や購入数、予算化の有無の違いに関係していると考えられる」と指摘している。紙芝居か絵本かという二者択一ではなく、紙芝居も絵本もという視点で保育を考えるためには、研修会のなかで紙芝居の意義や価値を理念型として伝えることにとどまるのではなく、実証的なデータをあわせて伝えていくことが必要であろう。それによって、紙芝居に対する保育士の学びが大きくなるものと思われる。

今後の課題として、質問紙の精緻化とサンプル数を増やした調査の必要性がある。とくに、前者に関しては、本研究では既存の質問紙を分析するにとどまっていた。紙芝居に対する保育士の学びをいっそう深く理解するためには、紙芝居の特性のなかの何をどのように学んでいるか、それが保育のなかでどう生かされているかについても調査をする必要がある。

参考・引用文献

1）鬘櫛久美子･種市淳子、「保育におけるメディアとしての紙芝居 - 紙芝居通史を中心に -」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(27)、53-67 (2005)

2）鬘櫛久美子・種市淳子、「保育のなかの紙芝居 - 倉橋惣三と「紙芝居」の関わりを中心に -」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(28)、95-105 (2006)

3）鬘櫛久美子・野崎真琴、「戦時下における紙芝居に関する議論-雑誌『紙芝居』を中心に-」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(31)、43-55 (2009)

４）鬢櫛久美子・野崎真琴、「保育現場における紙芝居の活用状況」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(32)、65-75（2010）
５）鬢櫛久美子・野崎真琴、「保育者養成課程における紙芝居‐学生のアンケート調査を通して-」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(32)、77-86（2010）
６）鬢櫛久美子・野崎真琴、「保育者養成課程における紙芝居　その２‐学生のアンケート調査を通して‐」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(33)、57-66（2011）
７）古橋和夫、「児童文化財とは何か-知育･徳育･美育のはたらき‐」、『保育者のための言語表現の技術』、萌文書林、10-22（2016）
８）石山幸弘・佐々木靖章、「立絵紙芝居の始発期に関する文献について」、『茨城大学教育学部紀要人文・社会科学・芸術』(55)、37-46（2006）
９）まついのりこ、『紙芝居の演じ方Q&A』、童心社（2006）
10）野崎真琴･小島千恵子･鬢櫛久美子･水落洋志、「紙芝居に関する保育者の意識と活用状況」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』(34)、87-96（2012）
11）大元千種、「保育現場における紙芝居の活用の課題‐保育学生の紙芝居経験を手掛かりとして‐」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』(8)、177-188（2013）
12）佐々木靖章・野村たかあき・石山幸弘、「紙芝居の実践指導研究-「演技する声」の問題」、『茨城大学教育実践研究』(24)、59-73（2005）
13）佐々木由美子、「保育における紙芝居をめぐる言説：紙芝居の導入時期と紙芝居観の変遷を中心に」、『東京未来大学研究紀要』(9)、53-62（2016）
14）正司顯好、「紙芝居の現状と課題 幼児教育における可能性 ： 埼玉県の幼稚園・保育園を中心に実施したアンケート調査に基づいて」、『小池学園研究紀要』(13)、13-23（2015）
15）正司顯好・浅井拓久也、「児童文化財における紙芝居と絵本の特性と形式の違いについて」、『小池学園研究紀要』(16)、印刷中（2017）
16）正司顯好・渡邉裕、「新人保育士と保育所長の紙芝居に対する考え方とその相違に関する分析」、『小池学園研究紀要』(15)、1-9（2017）
17）柳田多聞、「異なる演者による紙芝居上演に対する観客の注目の差異」、『長崎県立大学国際社会学部研究紀要』(1)、135-144（2016）
18）谷田貝公昭･廣澤満之、『実践保育内容シリーズ４　言葉』、一藝社（2014）

付記

本研究で分析した質問紙は、紙芝居講座の講師の一人である正司顯好氏（埼玉東萌短期大学）によって作成されたものである。質問紙の集計や分析は執筆者による。